

川柳マガジン東京句会2009年3月8日

自由吟 鑑賞・評 松橋帆波

「日常を詠んだもの」

1 回復後五体満足日々感謝

漢字で作られた作品は、構成上中七に四字熟語が入ることが多いが、四字熟語に何を語らせるかという視点で検証してみたい。

2 新聞でみんな包んだあの時代

「みんな」という表現が効いている。これによつて下五が読者にとつての「あの時代」になりえた。

5 独りぼっちになるのも視野に入れておく

「も」が効いている。視野に入れていく状況を、読者の側で膨らませることが出来る。

6 ロボットが掃除している妻の留守

実際にこのような家電が存在するので、事実の表現と見ることが出来るが、ロボットが喻であるならば、定年後の夫という見方も出来なくはない。しかし、その場合はもつと別の表現があるかと思う。

8 何ごとにも善意にとつて太つてる

ストレスが溜まらないからという句意だろうが、この場合「何ごと」が、具体的とまではいかないにしても、ある一定の状況が見える、と、句の広がりが増すのではないか。

19 不審者にしっぽ振る大飼っている

類想が多い作品。「保険所の人にも尾を振る」というパターンもある。課題吟だとすればそのような印象になる。雑詠としてみれば、犬が誰かの喻であるという理解もできる。ただ、そこまで読むことが正解かどうかは判らない。

20 大根も煮込まれながら味を出し

「大根も私も」「大根も貴方も」という理解をすれば面白いが、12の「小枝」との比較してみたい。

22 カニの足一本欠けたお買い得

最近「わけあり品」としてよく見かけるが、別の足をはめ込んで一杯として買わされるよ

りは公正だと思う。この数詞は動かない。二本、三本では句にならない。

24 目覚ましをかけずに眠る定年後

状況の共有制は高い作品だが、類想多数。逆に「目覚ましを掛ける日もある」という想なら広がりがあったか。

28 どうかしてただけですと妻の笑み

この作品、連作の一部のような気がするのだが。前後の作品の中で、補完し引き立てる意味合いがあるように思う。作者と妻の状況と距離がつかめないのが、読み手としては自由に広げていいのだろうが、広げすぎるのも作者に悪いような気がする。

「時事を詠んだもの」

3 籠の底たしかめて乗るエレベーター

最近続いた事件を上手くまとめている。別の話になるが、「エレベーター」「エレベーター」、「コンピューター」「コンピューター」などのカタカナ語表記について、音字数の観点から皆さんのご経験をお聞かせいただければと思う。

4 葬儀屋の追い風になるおくりびと

川柳の視点としては申し分ない。「おいかげ」「おくりびと」の韻は意識されたものかどうか判らないが、音として面白い。「葬儀社の追い風となるおくりびと」という表現と比較してみたい。

16 民営化茫然自失伏魔殿

1と同じく、四字熟語をどう使うか。茫然自失としたのは作者なのか、世間なのか。また、上五は今なら郵政を指すだろうが、賞味期限が短い表現といわざるを得ない。

14 官から民渡り廊下に棲む魔物

「渡り」という隠語と「渡り廊下」の語形の相似を作者は意図したのか、それとも読み手にそう意識されないほうが作者の思いが伝わるのか。技法としての効果について検証してみたい。

15 定年で惜しい人材眠らせる

天下り用語の側にすれば勇気付けられる作品。そこまで裏読みすることはないだろうが、繰り返し読むことで深い意味が出てくる作品。

23 北斎も描いた老舗が苦戦する

葛飾北斎が「繁盛さ名所の月も屋根から出」と詠んだといわれている越後屋、現在の三越のこと。北斎の「富岳二十六景 江都駿河町」や歌川広重の「名所江戸百景 駿河町」に描かれている。「北斎も描いた」という表現が川柳味を出している。

「季節を詠んだもの」

9 春の雪花の蕾に待ったかけ

見たままの報告という印象をぬぐえない。状況としては「春疾風」「余寒」というところ。「待ったかけ」に川柳性をどれだけ読み取れるかは読者次第か。

11 啓蟄に鉄砲玉の妻がいて

「妻がいる」「妻は鉄砲玉になる」など、幾つかの表現と比較検証してみた。

12 淡雪へ余情を抱いている小枝

余情を抱いたのは作者。だとすれば小枝は作者自身。そのように読むと深いものがある。20の「大根」と比較してみたい。

18 落椿一つ残して庭を掃き

落椿の花の色が白か赤か、そこを読者に委ねているところが面白い。読者の経験の中にある風景を呼び出してくれる作品。

21 春めいて糠喜びの風邪を引く

物足りない印象があるのは、原因と結果の流れに無理がないからだろうか。意外性のあることが川柳の条件だとは言い切れないが……。

27 歳時記もほっと息つく春の雪

早春の景か。「歳時記」とあるだけに、初春から薄氷(うすらい)、余寒(よかん)等、どのあたりの時期と読むか迷うかも。

「その他」

7 花丸にくらべ偏差値野暮なこと

「野暮なこと」という表現で、二つの言葉の対比の方向付けを行っている。瞬間的な理解と、読み込んでからの理解、読者は二度楽しむことができる。

10 親しげに近づいてくる神の使者

「神の使者」を読者がどう捕らえるか。それによって広がるか、ありがちな作品として見られるかだと思う。

17 死屍累々没句供養も春彼岸

「死屍累々」と「春彼岸」をつなぐ表現として、「没句供養」はどうだろう。

13 嘘だけは書かぬオイラの愛妻記

「愛妻」とは「恐妻」に通ずるという印象を抱かせてもらった。25の作品と比較してみたい。

25 エープリルフールだけでも嘘やめる

これをエイプリルフールに言ったとしたならば、「〇〇人は嘘つきだ」と〇〇人が言った、という有名な嘘吐きパラドックスになる。

26 ナツメロを歌う涙と聞く涙

歌う側と聞く側の涙の対比。同じ歌を介しているが、背景まで同じとは限らないと読むと深い作品。